外来から地域を創る

第22回

札幌白石記念病院（札幌市白石区）

シミュレーション研修などを精力的に実施し、外来看護のプロフェッショナル養成

※前列左から藤澤典史臨床工学技士室室長、本城しのぶ看護部長、辻真紀子外来科長、高瀬梨紗子看護師、後列左から三宅結貴診療支援係、冨田宏美看護師、濱口千絵看護師、高橋彩圭看護師、医事課 金子優診療支援係リーダー

社会医療法人医翔会札幌白石記念病院（野中雅院長・本城しのぶ看護部長、103床）は、脳神経外科単科病院として1982年に開院。2013年に循環器内科、2019年に心臓血管外科、血液浄化センター、2022年に回復期リハビリテーション病棟を開設。「頭から足の先までの動脈硬化性病変を治療する」を病院方針の中心に据えながら、急性期から回復期、在宅まで幅広い医療を展開しています。看護部では病院が進めるDX化の流れをうまく活用しながら、同時に「人対人」を意識した温かな看護の提供にも力を入れて取り組んでいます。

AI問診の導入で業務の効率化、患者の待ち時間短縮実現

現状、1日の平均外来患者数は200人前後で、多い時は270人程を数えます。これまで診療科の増設に伴い患者数も増えていますが、コロナ禍以前より医師事務作業補助者を配置するほか、2023年にAI問診を導入し、待ち時間の短縮、看護師負担軽減など外来機能の効率かつ効果的な機能強化を図りました。

本城看護部長

外来には看護補助者を含め12人（うちパート1人）の職員を配置。年齢層は20代～50代まで幅広く、育児中のスタッフが多くを占めています。

同病院は紹介受診重点医療機関として稼働しており、本年度の重点方針として病院組織を挙げて取り組んでいます。また一般社団法人日本脳卒中学会認定の一次脳卒中センターコア施設として、脳卒中や脳卒中を疑う患者を24時間365日受け入れています。本城しのぶ看護部長は、「患者さんを地域のかかりつけ医に戻すという役割をしっかり機能させていくことが重要」と紹介受診重点医療機関としての機能の確立・充実を最重点事項の一つとして意識しているほか、脳卒中コア施設としての機能の充実に向け、これまで組織体制の強化も進めてきました。

辻外来科長　本城看護部長

本城看護部長は現場をラウンドしながら情報を集めています

辻外来科長はこれまで様々資格を取得しキャリアアップを図ってきました

2023年度にAI問診導入

1人2つ以上の研修に参加を本年度目標の一つに

外来を統括する辻真紀子科長も、同病院の機能を強く意識した外来マネジメントに取り組んでいます。2023年4月に外来主任から昇格し、外来勤務は本年度7年目になります。同病院の外来機能に見合ったスタッフの育成へ、主任時代から教育を重視してきました。疾患に関する医師の研修会をはじめeラーニングや「Waculba」を活用した個々の学習も推進。さらには急性心筋梗塞や患者の暴言・暴力に関するシミュレーション研修を実施し、専門的知識と技術の習得を進めてきました。

「救急に関しては現状、全員が対

応できるようになってきています。プラスして今は、各専門性を高める教育を進めています。各自が〝頭から足の先までの動脈硬化性病変〟に対応する看護のプロフェッショナルを目指しています」。

辻科長は、循環器専門ナース、インターベンションエキスパートナースの資格を取得するなど、これまでさまざまな機会を捉えて自身のキャリアアップに努めてきました。現在は医療安全管理者も務めています。「当院は研修費用をすべて病院が負担してくれ、学ぶ環境は充実しています。学んだことが実践とつながり、より良い看護ができることは看護のやりがいにもなります。そうした喜びをたくさんのスタッフに経験してもらいたいですね」。

子育てをしながらも学ぶ意欲の高いスタッフがそろっています

本年度、外来部門において、「1人2つ以上の研修にいく」ことを目標の一つに掲げました。結果、ほとんどのスタッフが1人3つ以上の研修に参加しており、「学ぶ意欲」の高さに辻科長も手応えを感じています。

ベテランナースのほか20歳代の看護師も在籍していることから、外来におけるアセスメント力の均てん化は課題の一つと捉えていますが、病棟や患者サポートセンターとの連携も密にしながら、継続看護に向けた体制も今後さらに強化していきたいと考えています。

地域の訪問看護ステーション、高齢者ケア施設等との連携の場模索

同病院が力を入れる救急におけるより効率的なシステムづくりの必要性も辻科長は強く感じています。救急搬送されてくる高齢者は、施設等からさまざまな情報を持参してきた場合でも、「必要とする情報」がないケースも多々あることから、高齢者ケア施設や訪問看護ステーションなどが定期的に集まり情報交換の場の創設を模索しています。「白石区内の関係施設が一堂に会することで、必要な情報は何か、どこにつなげばいいかなど顔の見える連携が深まっていけばと考えています」。

本城看護部長もそうした場の必要性を以前から考えており、看看連携を一つの起爆剤に地域全体の医療・介護の連携を展望しています。「互いを知り、知識や情報の共有をする場があれば、互いにWinWinの関係でよりスムーズな連携となり、患者さんの大きなメリットになります」。

DXも今後さらに推進

このほか、AI問診のほかにもRPAの活用や医療関係者間コミュニケーションアプリ「Join」も以前より導入しています。病棟はもとより外来においても今後さらにDXを推進しながら、より効率的な業務改善により、やりがいを持って働き続けられる環境づくりを進めていく考えです。

参看日（さんかんび）かんごカフェ

～思いをつなぐ、看護をつなぐ～

看看連携を地道に実施

地域包括ケアシステム推進のキーパーソンである看護職が、施設や働く場所を越えて連携することは、これまでも、そしてこれからもその重要性は高まっています。特に病院と訪問看護ステーション、高齢者ケア施設等との連携は、その重要性が叫ばれて久しいにもかかわらず、まだまだ十分とは言えず、地域によっても温度差があるのが現実です。札幌市内の看護職の有志が立ち上げた「参看日」は、2019年に第1回を開催し、今年、10回目の開催となりました。病院の地域連携部門の看護師も参加し、現状や課題、そして連携への思いを交流。看看連携の深化へ、草の根の活動を続けています。